

(11) 特別養護老人ホームにおけるターミナルケアと介護職員の意識

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 渥美 昇平

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 小河 孝則 田並 尚恵

【要旨】

現在、特別養護老人ホーム（以下、特養と省略する）の入所者数は、人口の高齢化に伴って増加傾向にあり、また、入所者の要介護度も年々重度化している。このような中で、特養におけるターミナルケアに対する取り組みが重要視されている。そうしたことを受けて、平成18年4月の介護報酬改定において新たに「重度化対応加算」と「看取り介護加算」が創設され、特養での「終のすみか」としての役割が明確にされた。

しかしながら、特養におけるターミナルケアのあり方について具体的に明示されたものは現時点では極めて少なく、各施設においても取り組みには大きな差がある。こうした状況下において、実際に利用者のケアに当たっている介護職員は、ターミナルケアに対してどのような意識を持っているのであろうか。

本研究では、特養に勤務する介護職員を対象に、ターミナルケアに関する意識や経験について質問紙

調査を行った。調査を通して、ターミナルケアが特養において実践されるためには、どのような対応や対策が必要なのかを検討した。

調査用紙をA県およびB県に所在する特養の介護職員に配布した。配布数440部、回収数166部（回収率37.7%）であった。

調査結果より、介護職員の66.3%が、ターミナル期の利用者を介護することについて不安や戸惑いがあると回答した。そして、不安の有無と「ターミナル期利用者に対する特別なケア」、「利用者全般に対する死の意識」との間に有意な関連が見られた。また、不安の有無と年齢や経験年数との間には有意な関連が見られなかった。さらに、今後の研修に対する希望を尋ねたところ、84.4%が研修を希望していた。

今後、介護職員の抱える不安を解消ないし軽減させるためには、ターミナルケアにおける具体的な介護のあり方を明確化することと、介護職員に対する研修を充実させることが必要であると考えられる。